

# 漢方基本講座

- 八 網
- 六病位
- 氣血水
- 五臟論

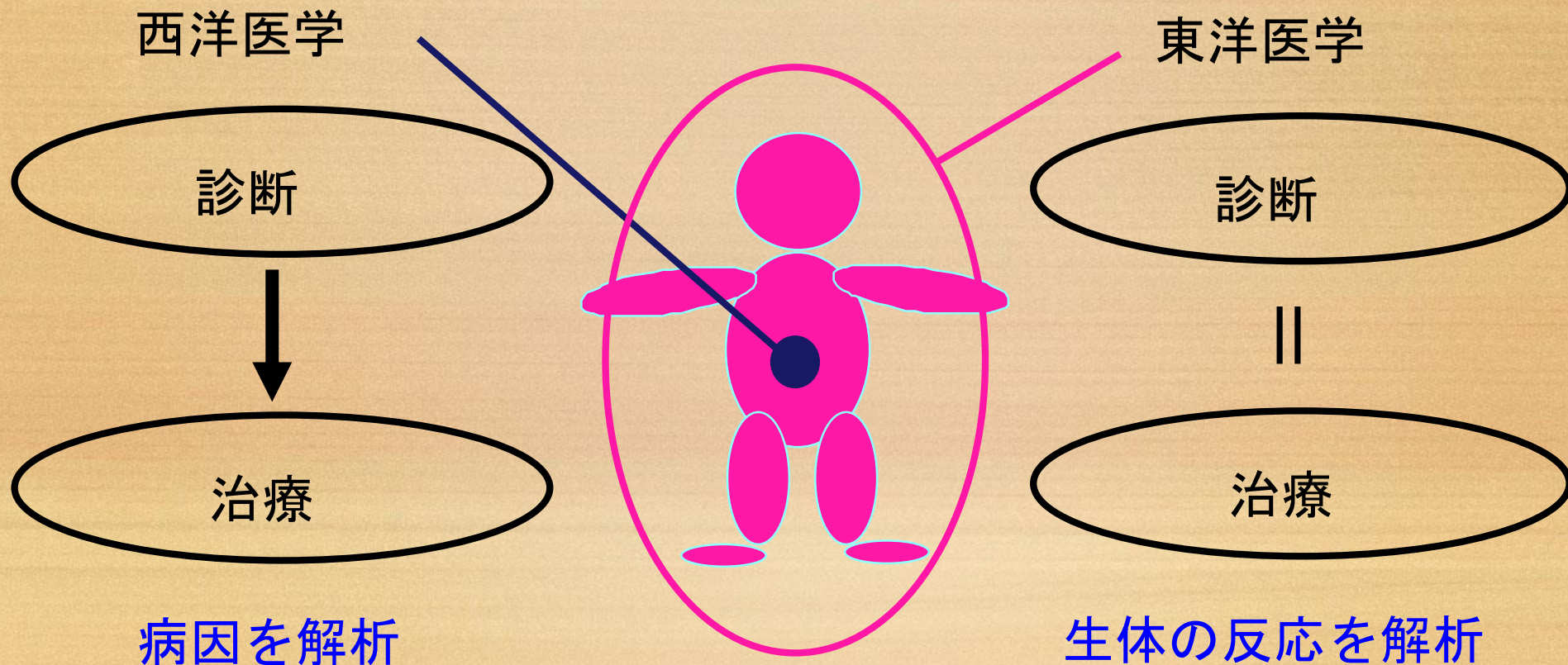
医療法人財団北聖会 北聖病院 漢方内科

後藤博三



## I-1. 証とは

「証とは患者が現時点で現している症状を陰陽・虚実・寒熱・表裏・六病位・気血水・五臓などの漢方医学上の基本概念をとおして認識し、さらに病態の特異性を示す症候を捕らえた結果を総合して得られる診断であり、治療の指示である。」





## I-2. 証をたてる

生体は種々の影響により変化していく流動的な存在である。  
その病態を東洋医学の概念を通して診断し、その病態に応じた漢方薬を選択することが「証」をたてることである。

### 生体の「証」



流動的

生体の東洋医学的病態  
(陰陽、気血水など)  
は変化する

- ・ 症状・四診
- ・ 陰陽、虚実  
気血水など  
の概念



生体の証に一致  
する方剤を選択  
する。

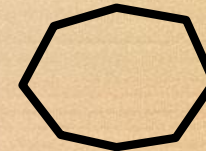
### 方剤の「証」



漢方薬 A



漢方薬 B



漢方薬 C

普遍的

漢方薬の適応病態  
は方剤により不変



## II. 漢方の基本概念と診断法

### 八綱

陰陽 虚実 寒熱 表裏

### 六病位

太陽病 少陽病 陽明病 太陰病 少陰病 厥陰病

### 気血水

気虚 気鬱 気逆 瘀血 血虚 水滯

### 五臓論

肝 心 脾 肺 腎



## II. 漢方の基本概念と診断法

### 1. 陰陽（いんよう）

種々の要因により、生体の恒常性が乱された場合、生体の呈する修復反応の性質が総じて熱性、活動性、発揚性のものを陽の病態（陽証）という。これに対して総じて寒性、非活動性、沈降性のものを陰の病態（陰証）という。

|    |   |
|----|---|
| 陽証 | 暑がりで薄着を好む、首から上に汗をかく、冷水を好んで多飲する、顔面が紅潮・眼球の充血、高体温傾向、脈が速い       |
| 陰証 | 寒がりで厚着を好む、電気毛布など温熱刺激を好む、顔面が蒼白、低体温傾向、背部・腰部・首の周囲が寒がる、四肢末梢が冷える |



## II. 漢方の基本概念と診断法

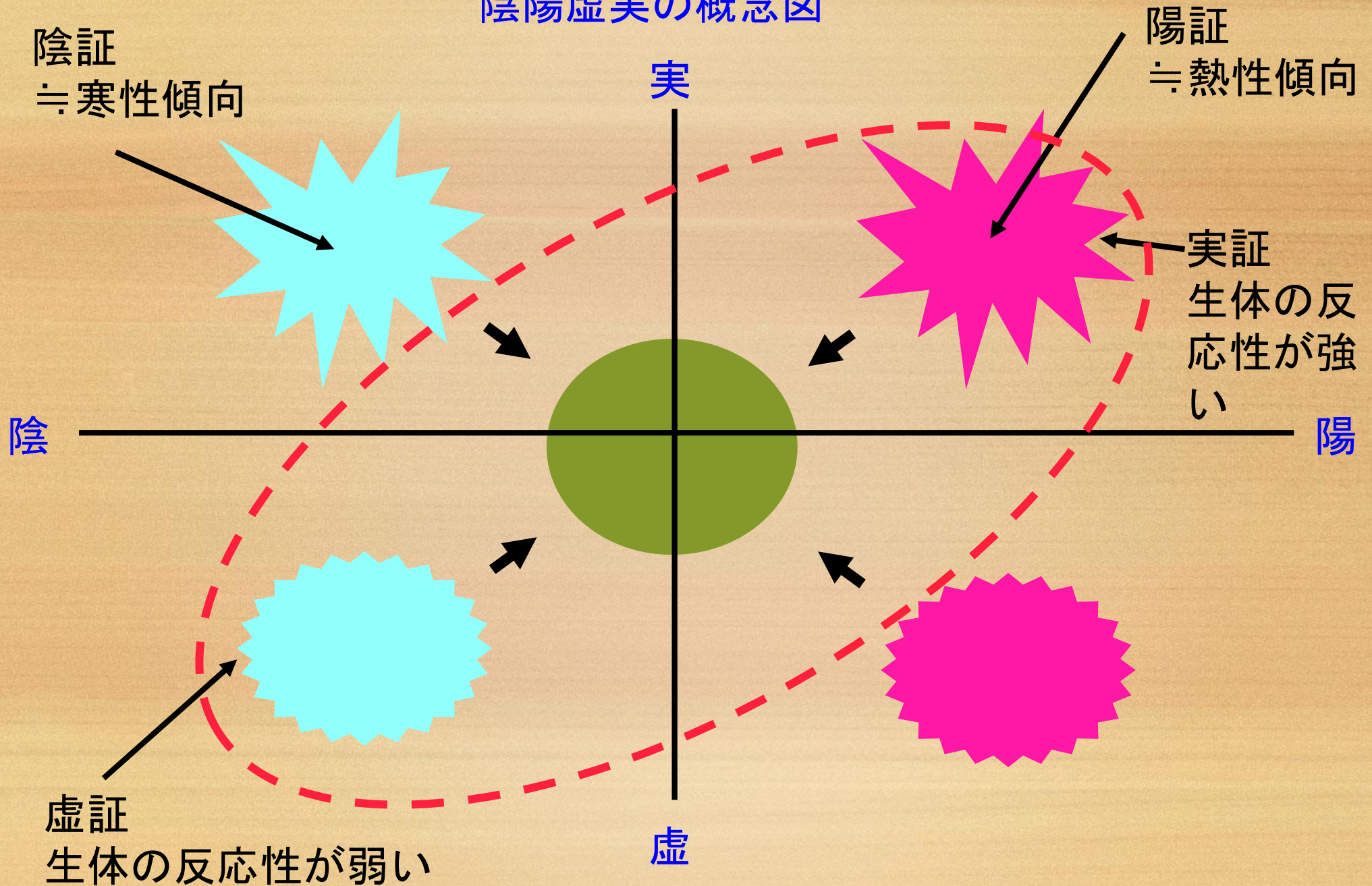
### 2. 虚実（きょじつ）

実の病態（**実証**）とは、生体に加わった外乱因子が強力で、これに対して動員された気血の力が旺盛な病態である。これに対して動員された気血の力が弱い病態を虚の病態（**虚証**）という。

|           |   |
|-----------|---|
| <b>実証</b> | 眼光・音声に力がある、脈が充実、腹力が充実、皮膚の色つやがよい、発赤腫脹の著しい皮疹、激しい疼痛、便臭の強い便 |
| <b>虚証</b> | 眼光・音声に力がない、脈が無力、腹力が軟弱、皮膚の色つやが悪い、自然発汗傾向、寝汗、便臭の少ない便、胃下垂   |



# 陰陽虚実の概念図

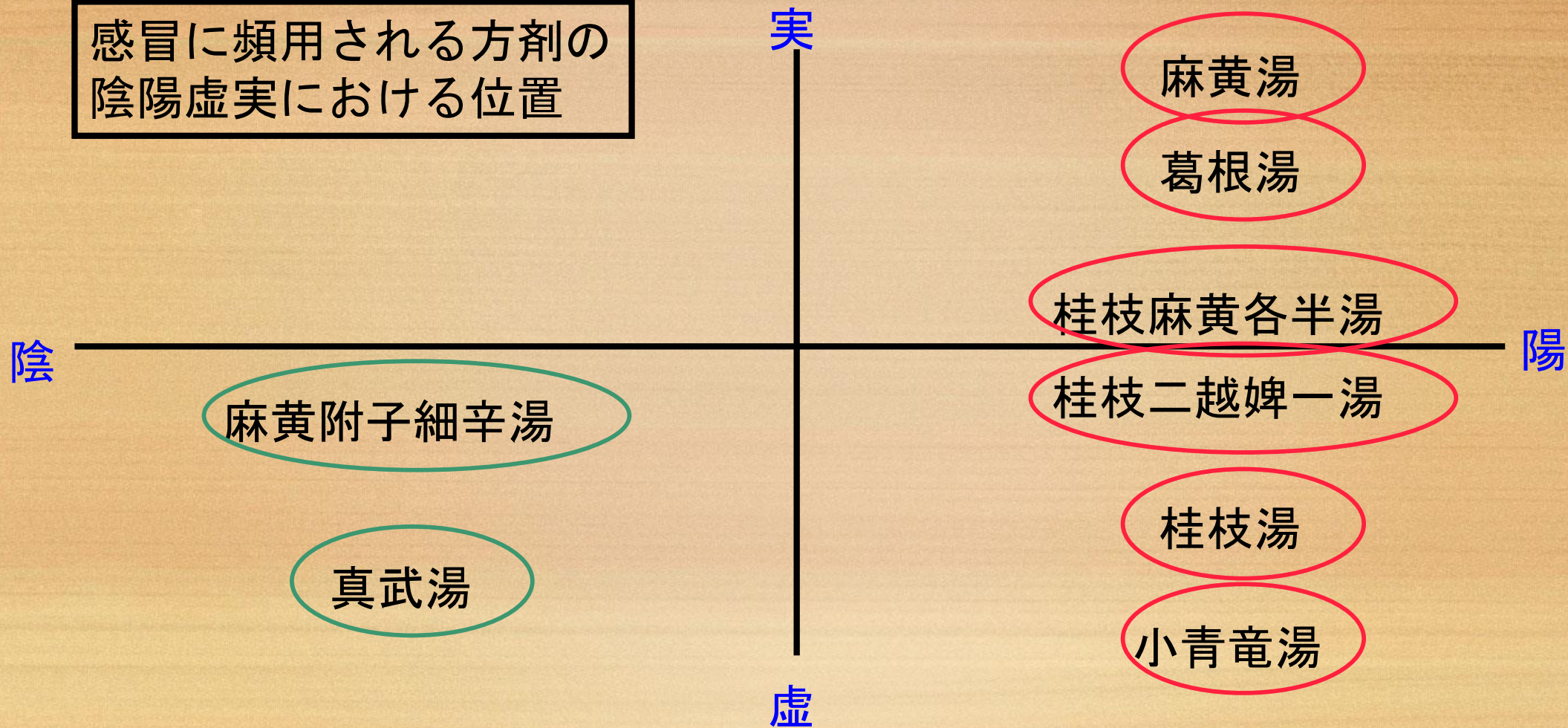




## 陰陽虚実を考慮した方剤の選択法

- 1) 陽実・陽虚・陰実・陰虚 を判断する。
- 2) その処方群の中で主症状に対応する方剤を選択する。

感冒に頻用される方剤の  
陰陽虚実における位置





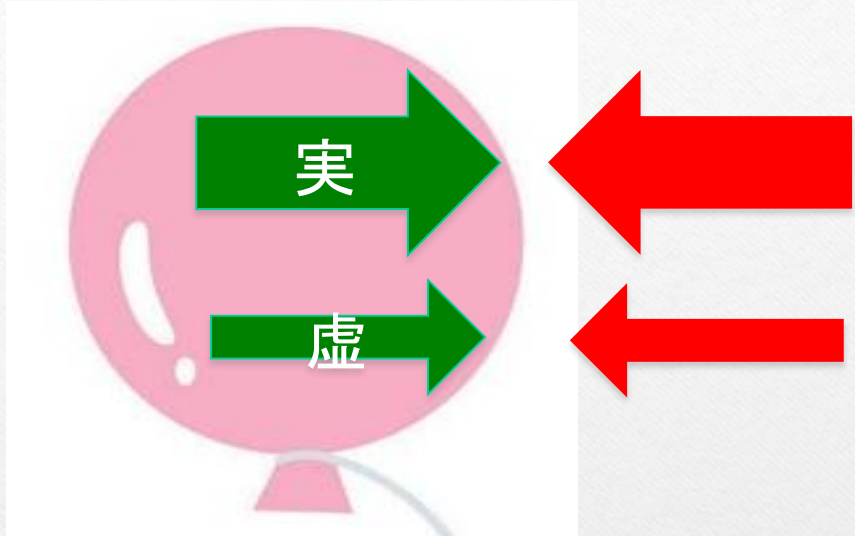
# 実証と虚証は生体の反応性の違い

陽証と陰証は生体のもつエネルギーの違い

陽証

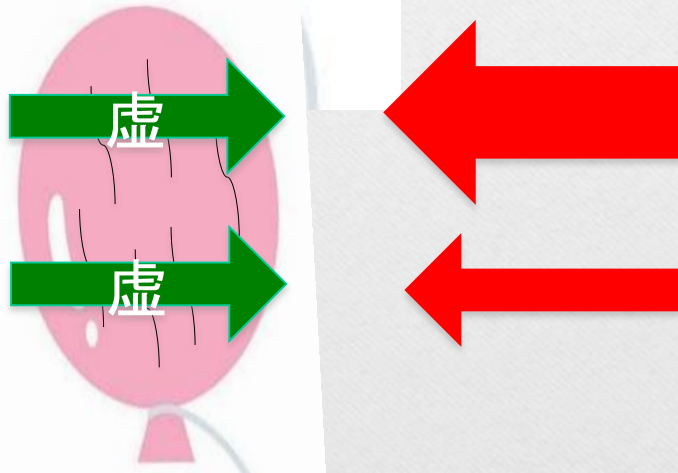
生体の反応性

外因（外邪）



**陽証**では強い外因（インフルエンザなど）に対して強い反応（高熱、関節痛、激しい咳嗽など）を示し、弱い外因（感冒など）に対して弱い反応（軽い咽頭痛など）を示す。

陰証



**陰証**ではいずれの外因に対しても弱い反応しか呈することができない。



## 症例 1

20才の男子学生。今朝から少し頭が重かったが講義に無理をして出ていたところ、夕方4時頃から頭痛が強まり、熱感も出てきた。午後5時来院。体温は38.5℃、脈は浮・数・実で、舌に著変なし。自然発汗の傾向はなく、後頭部から肩甲間部にかけて背筋が強くとっている。自覚的にも後頭部の緊迫感がある。



### 陽証の病態

- 麻黄湯 : 喀痰、咳嗽、発熱
- 葛根湯 : 発熱、咳嗽、項背部のこり
- 小青竜湯 : 水様鼻汁、咳嗽
- 桂枝湯 : 発熱、頭痛

## 症例 2

20才の女子学生。ここ数日精神的なストレスが重なったためか熟睡できなかった。今日の昼頃から軽い頭重感と身体の違和感があった。夕方になると咽頭痛と悪寒が加わったが、家庭教師のアルバイトがあり、無理をして出かけた。これを終える頃から本格的に気分が悪くなったため受診。脈はやや浮で弱。舌には特変がない。手足が冷えており、顔色もさえない。日頃の元気がすっかり失せている。自汗の傾向はなく、体温が37.4℃であるのに熱感がなく、ひたすらゾクゾクと寒いという。



### 陰証の病態

- 麻黄附子細辛湯 : 咳嗽、咽頭痛
- 真武湯 : 頭痛



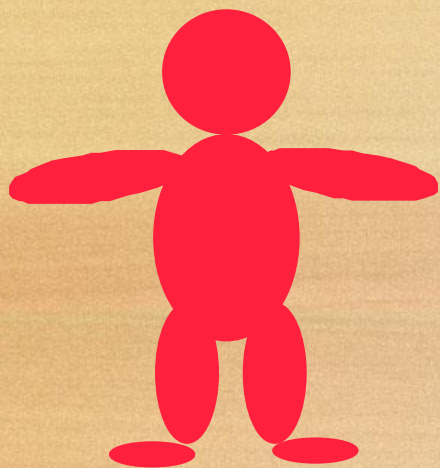
## II. 漢方の基本概念と診断法

### 3. 寒熱（かんねつ）

生体が外乱因子によって恒常性を乱された場合、生体が呈する病状が熱性（熱感、充血、局所温度の上昇）であるか、寒性（冷感、冷え、血流の低下、局所温度の低下）であるか、分かつ考え方である。寒熱の認識は陰陽の認識の一部を構成する要素であるが、もっぱら局所的な病状の認識法として用いられる。熱証の所見として顔面の充血・紅潮、口渇、頻脈、灼熱性の疼痛などがあり、寒証の所見として顔面蒼白、徐脈、四肢の冷えなどがある。同一人に寒熱が混在することも多く、上熱下寒（上部に熱感があり、下半身に冷えがある）などがその例である。

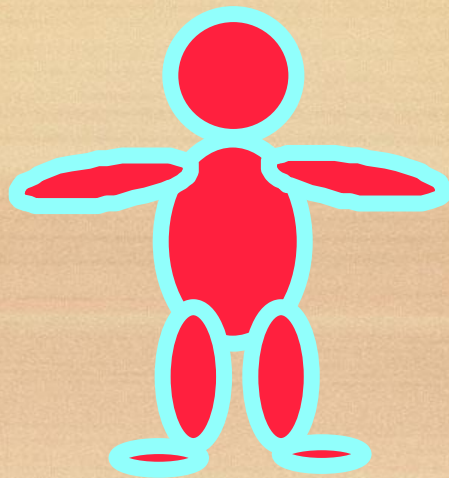


熱



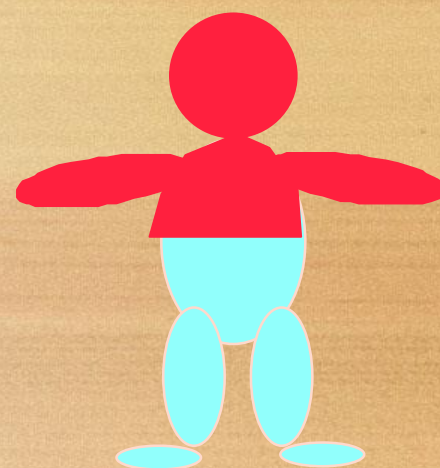
黄連解毒湯など

真熱仮寒



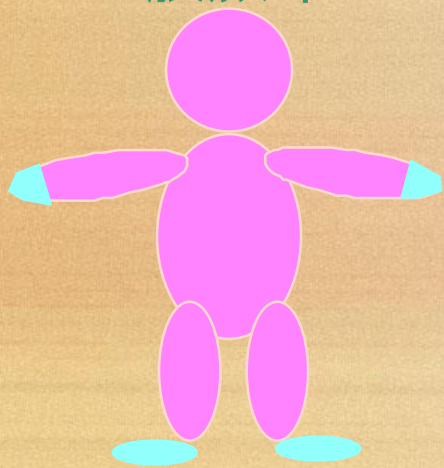
白虎加人参湯  
四逆散など

上熱下寒



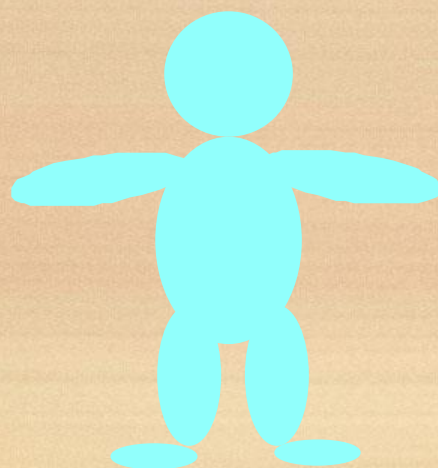
加味逍遙散  
苓桂朮甘湯など

四肢厥冷



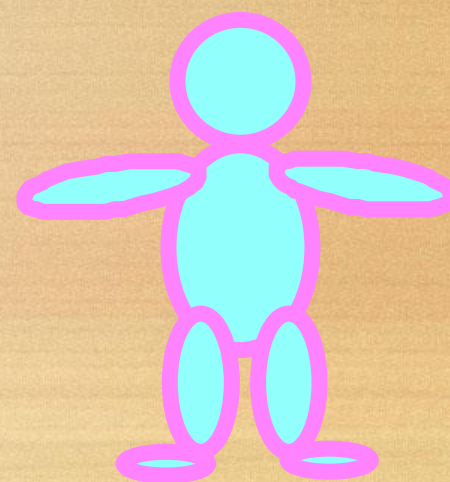
当帰四逆湯など

寒



真武湯、人参湯など

真寒仮熱



四逆湯など



## 寒熱に基づいた方剤の選択法

主訴) 蕁麻疹

### 症例A)

40才、男性。時々生じる蕁麻疹で来院。赤ら顔で暑がり。  
他覚所見として脈候はやや沈・実。  
舌候は紅舌・黄苔。腹候は腹力実。

解答：黄連解毒湯（少陽病期・実証）

### 症例B)

36才、女性。時々生じる蕁麻疹で来院。上半身はそれほどでもないが下肢は少し冷える。蕁麻疹発症時に時に熱感とたまにカ一と上半身が熱くなることがある。  
他覚所見として脈候は弦で弱。  
舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力やや軟。

解答：加味逍遥散（少陽病期・虚証）



## II. 漢方の基本概念と診断法

### 4. 表裏（ひょうり）

表証とは、頭痛、発熱、項背筋のこわばり、関節痛など体表部に症状が表出されている状態をいう。これに対して裏証とは腹満、下痢、便秘などの症候から成り立っている。また、咳嗽、胸痛などの胸郭内症状や悪心、嘔吐など上部消化器症状は半表半裏（はんぴょうはんり）としてとらえる。次に述べる六病位に照らし合わせると、表証は太陽病期（たいようびょうき）、半表半裏証は少陽病期（しょうようびょうき）、裏証は陽明病期（ようめいびょうき）から厥陰病期（けつちんびょうき）に対応する。

### 例えば

葛根湯



陰陽では陽証  
虚実では実証  
寒熱では熱証  
表裏では表証



六病位では太陽病  
気血水では気鬱  
五臓論では肺



特徴  
項背の  
強ばり



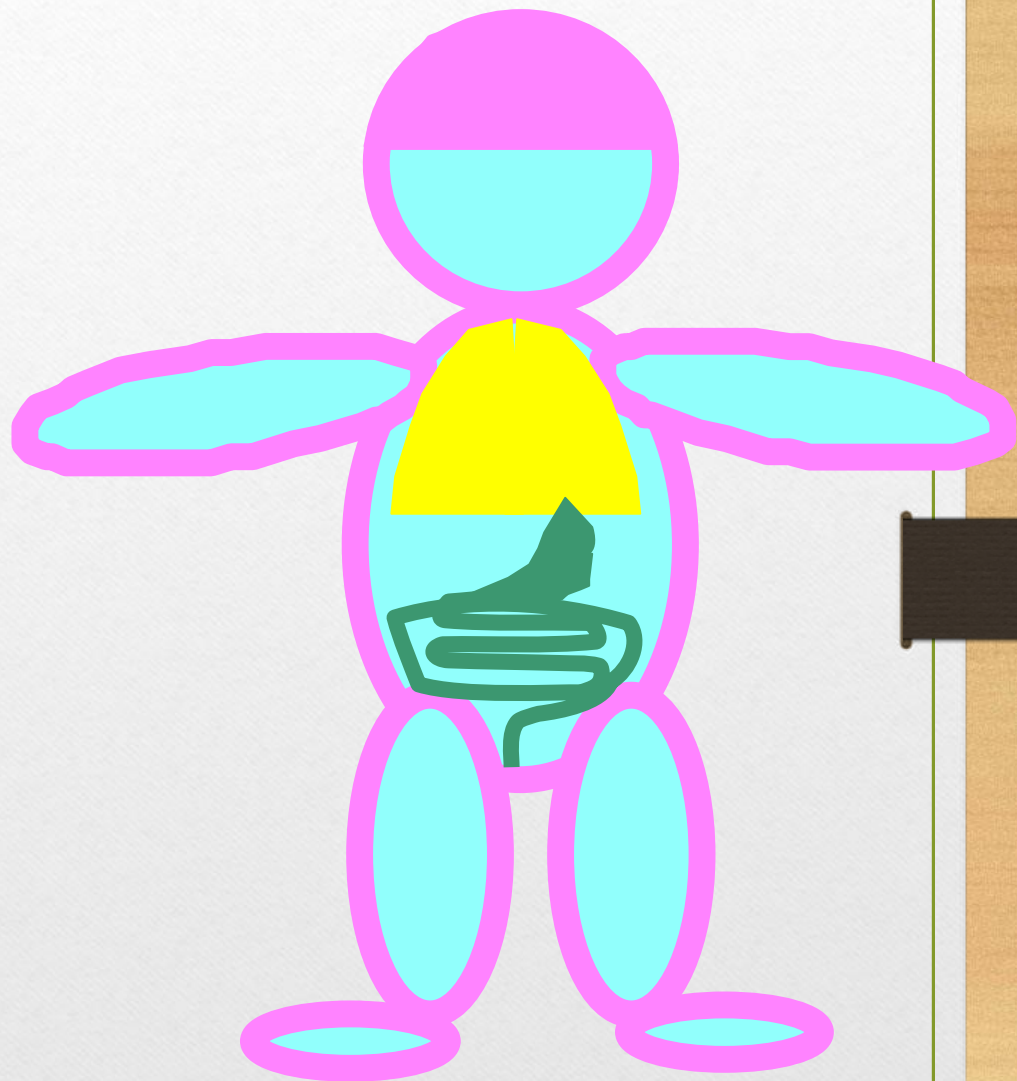
**表証**とは、頭痛、発熱、項背筋のこわばり、関節痛など体表部に症状が表出されている状態。



**半表半裏**（はんぴょうはんり）とは、咳嗽、胸痛などの胸郭内症状や悪心、嘔吐など上部消化器症状。



**裏証**とは、腹満、下痢、便秘などの症候から成り立っている。





## 表裏に基づいた方剤の選択法

主訴) 下痢

### 症例A)

今朝から頭痛・悪寒・発熱があり、食欲不振と下痢がある。  
他覚所見として、手足は冷たく、脈候はやや浮・虚。舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力軟弱で振水音を認める。

解答：桂枝人参湯

構成生薬：桂皮、人参、白朮、甘草、乾姜

### 症例B)

元来、食が細く疲れやすい。数ヶ月前から下痢を時々生じるようになった。また、腹部を中心に冷えを自覚する。  
他覚所見として脈候はやや沈で弱。舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力軟弱で振水音を認める。

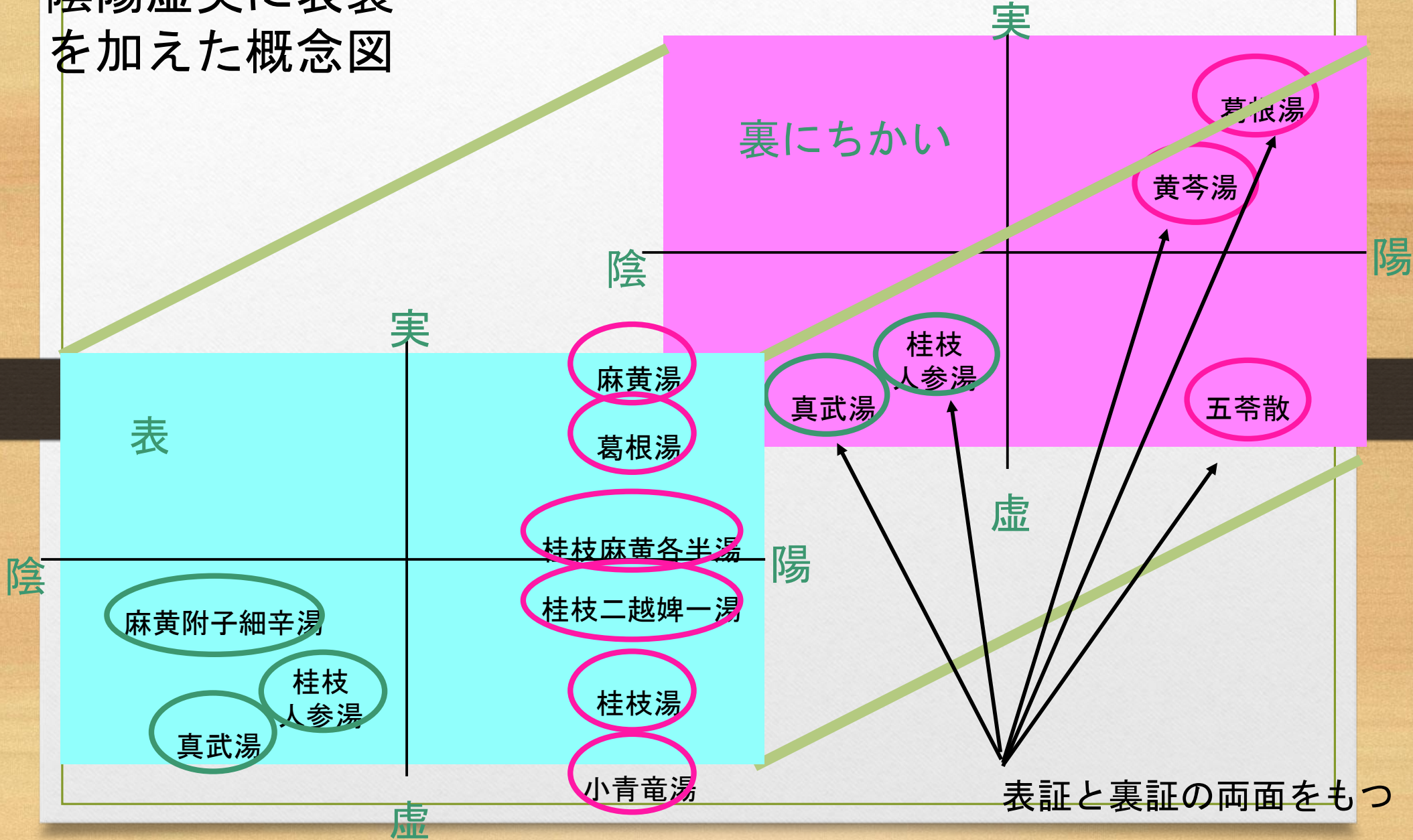
解答：人参湯

構成生薬：人参、白朮、甘草、乾姜



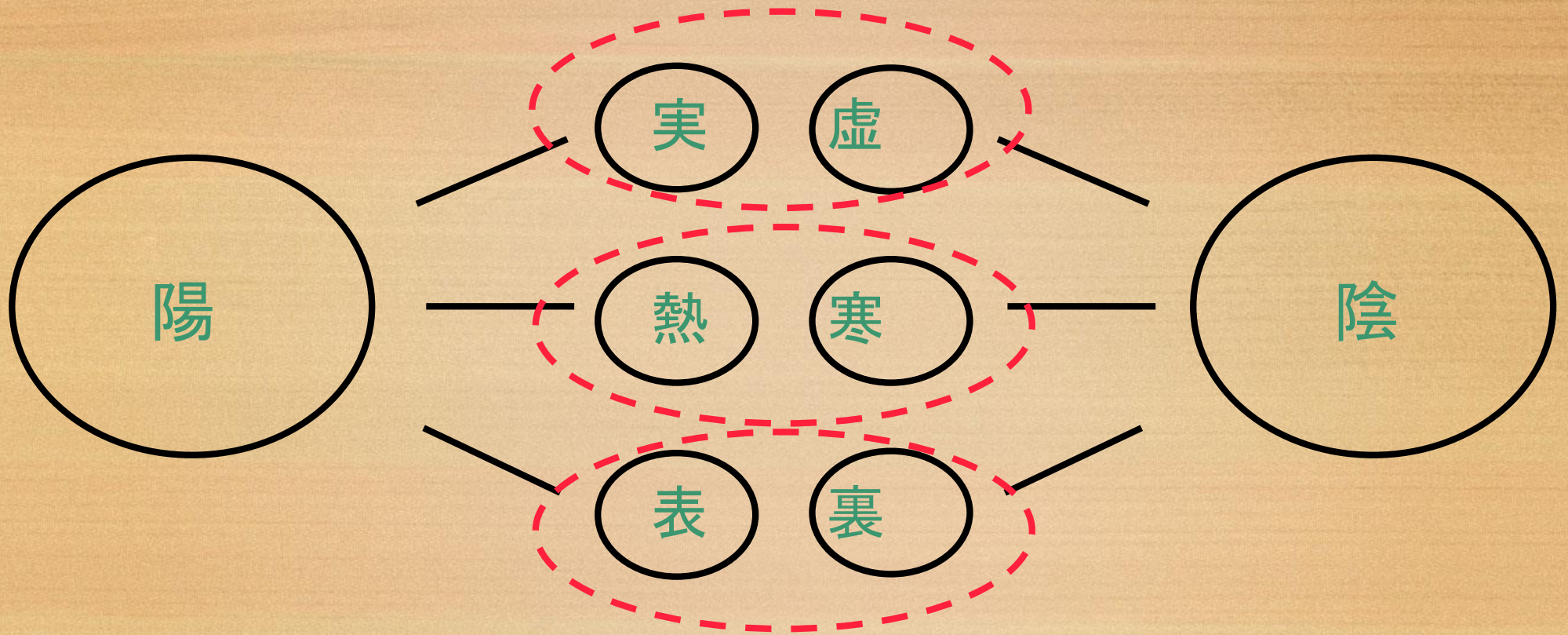
ウイルス性胃腸炎に用いられる漢方薬

陰陽虚実にあらわしめを  
加えた概念図





# 陰陽と虚実、寒熱、表裏の関係





## II. 漢方の基本概念と診断法

### 5. 六病位（ろくびょうい）

疾病状態は生体の側の気血水の量と外乱因子の変化に伴い時々刻々と流動するという理念が六病位による疾病のステージ分類である。疾病のステージを陽と陰に大別し、陽の群を太陽病期、少陽病期、陽明病期に分け、陰の群を太陰病期、少陰病期、厥陰病期に分類する。

前述した「証は時々刻々と変化する」というのは、この概念に基づき病態が変化すると考えるからである。例えば、かぜのひき初めには、太陽病期の症状がしばしば認められる。それが治癒せず進行すると食欲不振や弛張熱などの症状が現れ、少陽病期に移行する。さらに高熱が遷延する陽明病期や体力の極端に疲弊した太陰・少陰病期に移行していく。厥陰病期は、重篤な肺炎などに移行した末期的な病状である。







## 六病位における主要症状と主な治療方剤

| 陰陽 | 病位   | 主要症候                     | 主な治療方剤         |
|----|------|--------------------------|----------------|
| 陽証 | 太陽病期 | 悪寒・発熱、頭痛、項背部のこわばり、疼痛、関節痛 | 葛根湯<br>小青竜湯    |
|    | 少陽病期 | 悪心・嘔吐、食欲不振、胸内苦悶、弛張熱      | 小柴胡湯<br>半夏厚朴湯  |
|    | 陽明病期 | 腹満、便秘、口渇、身体深部の熱感         | 大承気湯<br>白虎加人参湯 |
| 陰証 | 太陰病期 | 腹満、腹痛、食欲不振、下痢、腹の冷え       | 小建中湯<br>当帰芍薬散  |
|    | 少陰病期 | 全身倦怠感、手足の冷え、背部悪寒、胸内苦悶、下痢 | 真武湯<br>麻黄附子細辛湯 |
|    | 厥陰病期 | 全身の冷え、不消化下痢便、口内乾燥、胸内苦悶   | 茯苓四逆湯          |



## 六病位に基づいた方剤の選択法

主訴) 咳・痰

### 症例A)

今朝から悪寒・発熱があり、喀痰を伴う咳嗽がある。  
自汗はない。他覚所見として脈候は浮・実。  
舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力中等度・胸脇苦満を認める。

解答：麻黄湯（太陽病期、陽証、実証、表証、熱証）

構成生薬：麻黄、杏仁、桂皮、甘草

### 症例B)

一週間前から、喀痰を伴う咳嗽がある。夕方に熱っぽい、  
自汗と口渇がある。他覚所見として脈候はやや浮で弦・実。  
舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力中等度。

解答：麻杏甘石湯（少陽病期、陽証、実証、半表半裏証、熱証）

構成生薬：麻黄、杏仁、石膏、甘草



# 麻黄湯と麻杏甘石湯



麻黄



杏仁



甘草

+



桂皮

=

麻黄湯  
陽・実  
表証  
太陽病

+



石膏

=

麻杏甘石湯  
陽・実  
半表半裏証  
少陽病



## 6. 気血水

この概念は、気血水が生体の基本をなすという東洋医学の理念に基づき、気血水の不調により病気が生ずるとする考え方である。気・血・水のいずれが主役となるかで病状も異なり治療方針も違ってくる。以下にその病状と治療の主体となる漢方薬を概説する。

### 1) 気

気とは生命活動を営む根源的なエネルギーである。気の異常による病態には次の3つがある。

#### 気虚（ききょ）：

気の量に不足を生じた病態である。生命体としての活力の低下として表現される。治療薬として薬用人参を主体とした**人参湯類**と桂皮を主体とした**桂枝湯類**が用いられる。



## 気鬱（きうつ）：

本来順調に体内を巡っている気の循環に停滞を来した病態である。停滞した部位により、種々の症状を呈する。治療薬として香蘇散や半夏厚朴湯などが用いられる。



## 気逆（きぎやく）：

気の循環の失調した病態である。腹部を起点に胸内に動悸を生じ、さらに頭痛などを起こすもの。胸部を起点に咳嗽・胸満感を伴って、咽喉部絞扼感、顔面紅潮、怒責などを起こすもの。心窩部の不快感で発し、胃液を吐出するもの。四肢末梢を起点として冷痛が中枢側へ波及するものが認められる。治療方剤として桂皮・甘草を配剤する桂枝人参湯、苓桂甘棗湯、桂枝加竜骨牡蛎湯や加味逍遙散、呉茱萸湯などが用いられる。



主症状

気虚

身体がだるい  
気力がない  
疲れやすい  
食欲不振  
風邪をひきやすい



臨床応用

消化器疾患  
悪性腫瘍  
諸疾患の重症時  
高齢者の諸疾患  
など



使用方剤

人参湯類（人参湯、  
六君子湯）  
桂枝湯類（桂枝湯、  
小建中湯）など

気鬱

抑うつ傾向  
喉のつかえ  
季肋部のつかえ感  
腹部膨満感  
朝調子が悪い



うつ状態  
咽喉神経症  
喘息  
過敏性腸症候群  
頭痛症 など



香蘇散  
半夏厚朴湯 など

気逆

冷えのぼせ  
動悸発作  
発作性に生じる症状  
（頭痛、咳、腹痛）  
顔面紅潮



片頭痛  
不整脈  
喘息発作  
過敏性腸症候群  
更年期障害 など



桂枝人参湯  
加味逍遙散  
苓桂甘棗湯 など



## 2) 血

血とは血液のみを指すのではなく、東洋医学では生体の物質的側面を支える赤色の液体を意味する。このことから、皮膚や毛髪、感覚器の異常も血の異常として捉える。血の異常による病態には次の2つがある。

**血虚（けっきょ）**：血の量に不足を生じた病態である。消耗性疾患、外科的侵襲、消化管出血、不正性器出血などの血の消費の亢進や成長に見合った血の生成ができない、薬物などにより血の生成が障害されるなどによりもたらされる。治療方剤として**四物湯**や**芎帰膠艾湯**が代表的である。術後などで気虚を伴う場合は、**十全大補湯**なども頻用されている。



## 瘀血（おけつ）：

気とともに体内を順調に巡るべき血の流通に障害をきたした病態である。外的なストレス（寒、湿、熱）、打撲、手術の他に精神的ストレス、運動不足、睡眠不足、便秘などによりもたらされる。桃核承気湯、桂枝茯苓丸、当帰芍薬散などが代表的な瘀血改善薬である。



## 血虚

## 瘀血

### 主症状

貧血、肌荒れ  
脱毛、眼精疲労  
耳鳴  
筋力低下

肩こり  
生理不順  
便秘  
しみ・そばかす

### 臨床応用

皮膚科疾患  
神経筋疾患  
術後  
諸疾患に随伴する  
貧血など

婦人科疾患  
動脈硬化性疾患  
皮膚科・精神科疾患  
外傷 など

### 使用方剤

四物湯  
芎帰膠艾湯  
など

桃核承気湯  
桂枝茯苓丸  
当帰芍薬散 など



### 3) 水

水とは生体の物質的側面を支える無色の液体である。この水が偏在した病態を水滯（すいたい）あるいは水毒（すいどく）という。外乱因子（風、寒、湿）あるいは気血の異常（気虚、瘀血）、五臓の異常（特に腎）によって生じる。水滯の生じる部位で適応となる方剤も選択される。身体の重い感じ、めまいなどを主とする全身型では五苓散や真武湯、朝のこわばり、関節痛を主とする皮膚・関節型では桂枝二越脾一湯や防己黄耆湯、喘息などの胸内型で水様鼻汁を伴う場合は小青竜湯、つわりなどの悪心嘔吐などの心下型では小半夏加茯苓湯などがその例である。



## 全身型

## 皮膚・関節型

## 胸内型

## 心下型

### 主症状

身体がだるい  
全身のむくみ  
下痢、めまい感  
立ちくらみ  
尿利異常

こわばり  
関節腫脹  
皮疹

水様鼻汁  
喘鳴

悪心・嘔吐

### 臨床応用

浮腫性疾患  
自律神経失調症  
めまい症  
泌尿器科疾患  
消化器疾患  
など

頸椎症  
関節リウマチ  
変形性膝関節症  
皮膚疾患  
など

アレルギー性  
鼻炎  
気管支喘息  
心不全  
など

逆流性食道炎  
機能性胃腸症  
など

### 使用方剤

五苓散  
真武湯など

桂枝二越脾一湯  
防己黄耆湯など

小青竜湯  
など

小半夏加茯苓湯  
など



## 気血水の概念による処方を選択法

- 1) 主症状を気血水の概念にあてはめて処方群を選択する。
- 2) その処方群の中で陰陽虚実等の概念を導入し、処方を絞る。

例：生理不順

↓  
瘀血の処方群を選択

桃核承気湯  
大黄牡丹皮湯  
桂枝茯苓丸  
加味逍遥散  
当归芍薬散

↓  
陰陽虚実から処方を絞る

例：陽実証

桃核承気湯  
大黄牡丹皮湯

↓  
特異的症候から処方を絞る

例：のぼせ

桃核承気湯



## 気血水による処方を選択法

主訴) めまい・ふらつき

### 症例A)

出産後、めまい・ふらつき感が生じ増悪傾向にある。自覚的には、冷え性で尿不利、雲の上を歩いているような感じがする。他覚所見として脈候は沈・細。舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力軟・臍上悸を認める。

解答：真武湯、陰虚証・少陰病期・水滯

構成生薬：茯苓、芍薬、白朮、生姜、附子

### 症例B)

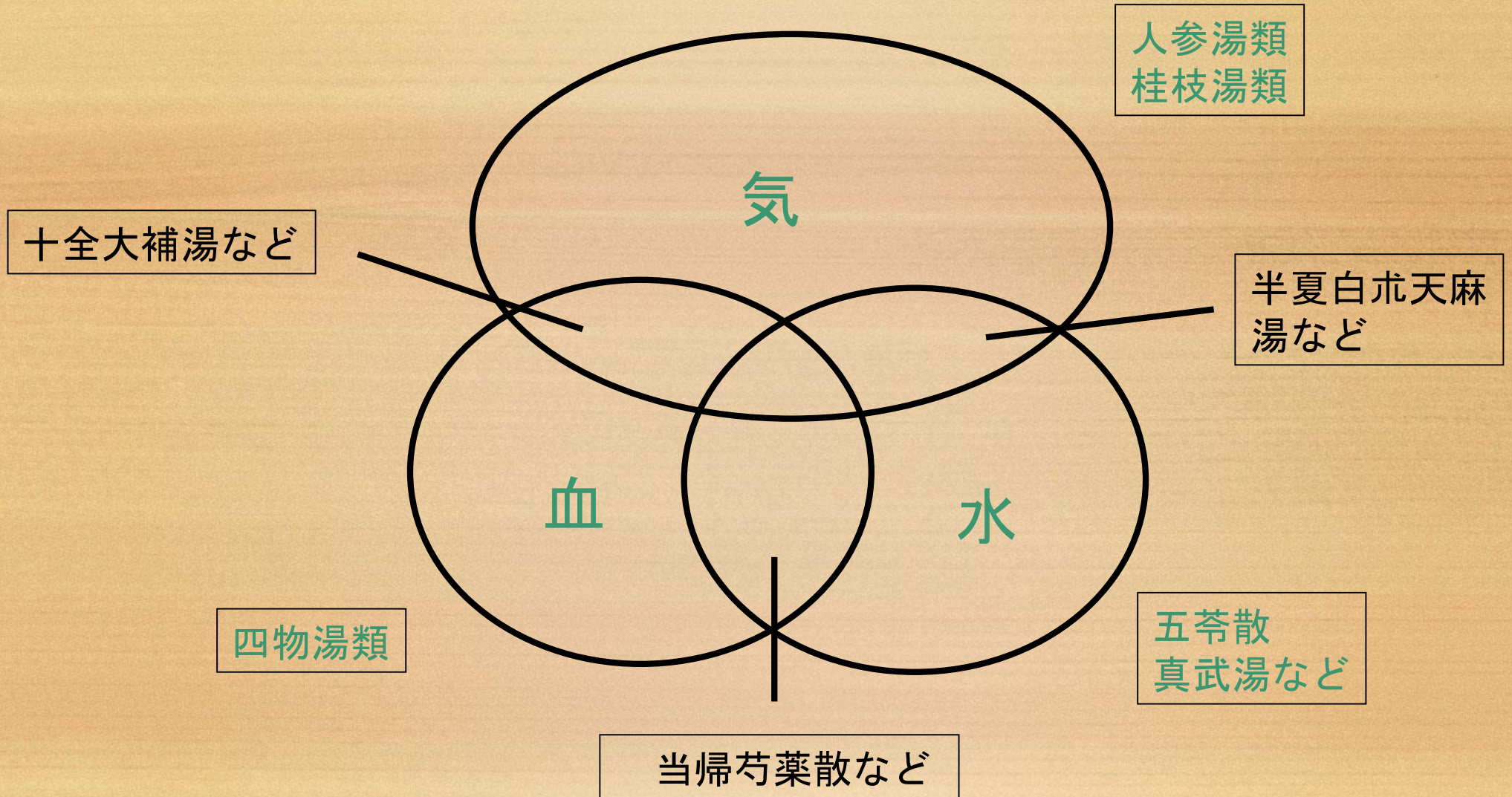
たまに、めまい・ふらつき感が生じ最近増悪傾向にある。自覚的には、冷え性で尿不利、肩こりが著しい、生理は不順傾向。他覚所見として脈候は沈・細。舌候は紅舌・白苔。腹候は腹力軟・左右臍傍の圧痛を認める。

解答：当帰芍薬散、陰虚証・太陰病期・瘀血

構成生薬：当帰、芍薬、川芎、茯苓、沢瀉、蒼朮



# 気血水と方剤の関係



## 「心身一如」

疾病の発現と助長において、心と身体とが密接不可分の相関関係にあることを約言した語で、東洋と西洋とを問わず古代医学が本質的に具有した最も重要な理念の一つ



## 7. 五臓

この概念は、体内の諸器官を五臓に分け（現在の5つの臓器と重なる部分はあるが同一ではない）各臓器の異常がどのような病症をおこすかにより成り立つ考え方である。その五臓の働きと失調病態を概説する。また、五臓は互いに影響を及ぼし相生相剋関係を形成する。

1) 肝：肝は精神活動を安定化させる、新陳代謝を行う、血を貯蔵し全身に栄養を供給する、骨格筋の緊張を維持するなどの働きをする。肝の異常により、痙攣発作、易怒性、栄養不良、眼精疲労、爪の成長異常などが生じる。治療方剤として、抑肝散、釣藤散などの処方がある。



2) 心：心は意識水準を保つ、覚醒・睡眠のリズムを調整する、血を循環させるなどの働きをする。心の異常により、失神、不眠、逆上感、不安感、動悸、舌炎などが生じる。治療方剤として、黄連解毒湯、半夏瀉心湯などがある。

3) 脾：脾は食物を吸収し水穀の器を生成する、血の流通をなめらかにし血管からの漏出を防ぐ、筋肉の形成・維持を行うなどの働きをする。脾の異常により、焦燥感、抑うつ、易疲労、筋力低下、出血傾向、食欲低下、下痢、口角炎などが生じる。治療方剤として、人参湯、六君子湯などがある。



4) 肺：肺は呼吸により気を取り入れてその一部を赤色化し血を生成し一部を水に転化する、皮膚の機能を制御し、その防衛力を保持するなどの働きをする。肺の異常により、憂うつ、易感染性、鼻閉、呼吸困難、病的な発汗などが生じる。治療方剤として、小青竜湯、麦門冬湯などがある。

5) 腎：腎は成長・発育・生殖能を制御し、骨・歯牙の形成と維持、水分代謝の調整、呼吸能の維持、思考力・判断力・集中力を維持するなどの働きをする。腎の異常により、易驚性、発育不良、インポテンツ、骨代謝異常、水分代謝異常、排尿障害、腔炎、難聴などが生じる。治療方剤として、八味地黄丸、牛車腎気丸などがある。



## 五臓論による処方を選択法

主訴) 全身倦怠感

### 症例A)

55才、男性。最近仕事が忙しく過労気味であった。全身倦怠感も自覚するようになったため、近医で諸検査を受けたが明らかな異常所見を認めず。全身倦怠感とともに食欲不振、冷えも生じてきたため当科を初診した。他覚所見として脈候は沈・細。舌候は紅舌・白苔で舌縁に齒痕を認める。腹候は腹力軟・心下痞鞭を認める。

解答：人参湯、陰虚証・太陰病期・脾虚

### 症例B)

70才、男性。最近全身倦怠感が続くため、当科を初診した。食欲は以前と変わらない。時に腰痛を自覚し、夜間尿も一晩に2回ほどある。下肢は冷える。

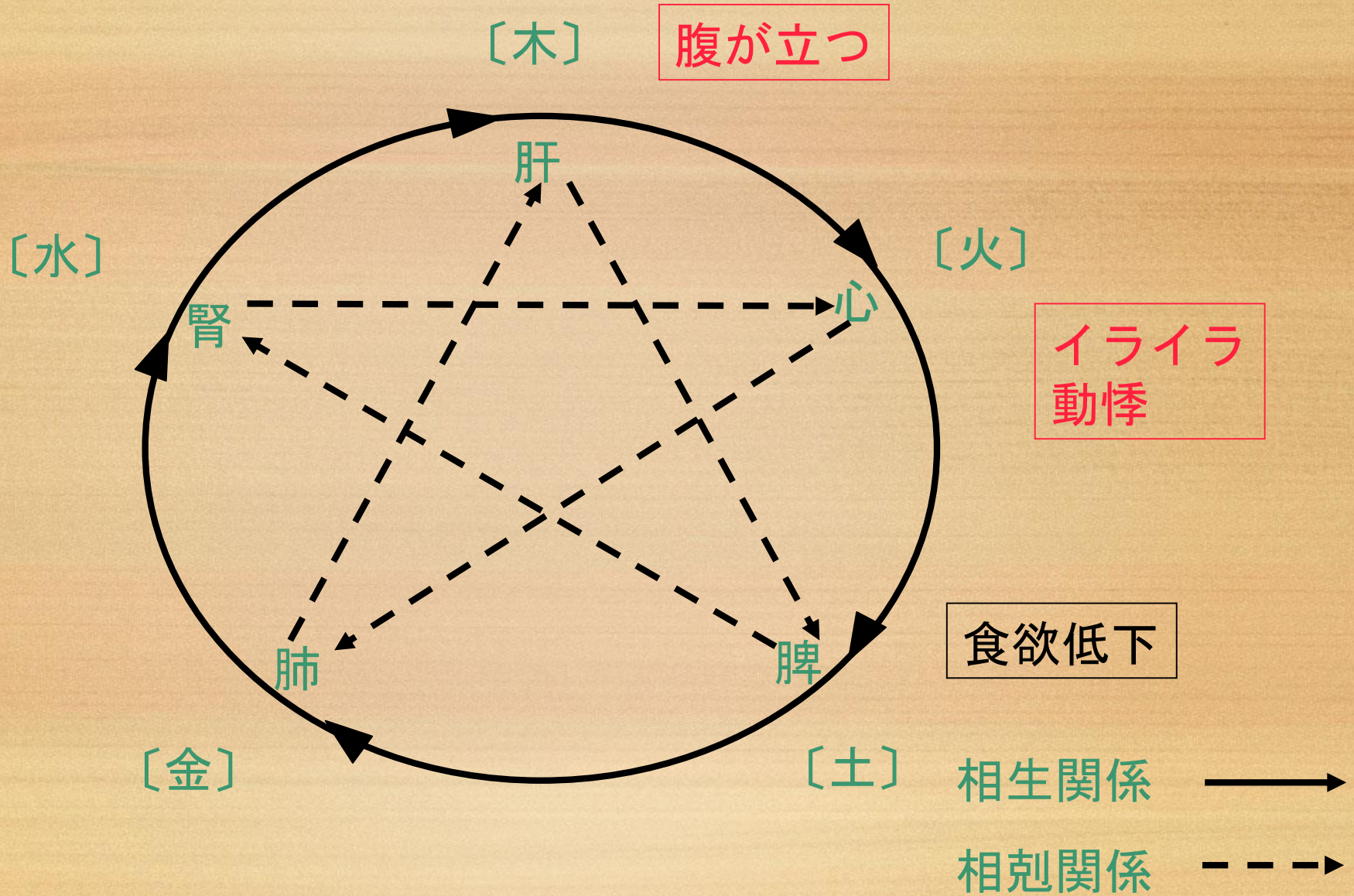
他覚所見として脈候は沈・細。舌候は紅舌で鏡面舌。

腹候は腹力軟・小腹不仁を認める。

解答：八味地黄丸、陰虚証・太陰病期・腎虚



# 五臓の相生相剋関係





# 漢方の基本概念の臨床応用

愁訴

時間経過で考えやすい

気・血・水の概念にあてはめやすい

五臓の異常ととらえると考えやすい

八綱

六病位

気血水

五臓論